



ありがとう、ロータリアン！ ⑤ 忘れられない信頼の重み



瑞鋼貿易株式会社社長
社団法人中華民国扶輪米山会第4代理事長
ゲン インキョウ
阮 允恭 さん

出身：台湾
奨学期間：1971 - 74
学校名：神戸大学大学院
世話クラブ：神戸RC

信頼された重みと喜び

私は1942年生まれ、今から約40年も前の米山記念奨学生です。

日本語を半年間勉強し、台湾教育省が実施する試験に合格して留学を果たしましたが、いざ空港に着いてみると、日本語がほとんどわかりません。神戸大学大学院に合格するまで4度も受験し、ようやく修士課程経営学研究科に進学できました。この学科で、入試に合格して入学した私費留学生は、戦後25年で私が初めてだったそうです。

修士2年の時、米山記念奨学生になりました。後から聞いたところ、私は補欠合格で、とりあえず1年間だけ採用して様子を見よう、ということだったそうです。世話クラブの神戸ロータリークラブ（RC）では「阮ちゃん、栄養補給も兼ねて毎週例会において」、「阮ちゃん、うちの工場を見学せんか？」と、皆さんからかわいがっていただきました。こうして思い出すと、「阮ちゃん」と呼んでくださる懐かしい声が耳によみがえります。私は皆さんに会えることが心底うれしくて、毎週のように例会場へ足を運びました。

特に忘れられないのは、カウンセラーの故・鶴谷忠治さんです。ある時、「阮ちゃん、2週間ほど船旅に行くから留守番を頼めへんかな」と言われ、自宅の鍵を手渡されたのには仰天しました。私は鶴谷さんにとって赤の他人、しかも日本人ではなく、留学生なのに……。 「かまへん、新聞代と水道代も置いておくしな」。今、思い

返しても、自分に同じことができるかと問われれば、否です。それほどまでに自分を信用してくれた、という重みと喜びに、深く深く心を打たれました。

日本との絆、学友同士の絆を胸に

マーケティングを学んで帰国した私は1977年、現在の会社、瑞鋼貿易株式会社に入社しました。日本の精密機器メーカーの総代理店で、圧力計などの輸入販売を行っています。

入社時は経営難で、営業部長を任された私は、まず販売価格を上げました。「売れていないものを高くしてどういうつもりだ？」と、ずいぶんたかれたものです。私はマーケティング戦略の知識に基づき、顧客に品質の高さを訴え、説得に当たりました。一方、社内では鉛筆1本に至るまで節約を徹底し、ようやく利益を上げることができた喜びを、今でも忘れることができません。米山記念奨学生になった者は、仕事もロータリーの精神で一生懸命に頑張ります。その次には恩返しの気持ちが必ず湧いてきて、学友同士で集まろう、何か奉仕活動しようという動きが出てきます。

台湾では70年代後半から不定期に米山学友が集まるようになり、83年に学友会として正式に発足しました。その後、97年に法人として認可され、2002年に「(社) 中華民国扶輪米山会」となりました。

われわれ学友会の活動内容は多岐にわたります。台湾の学友で初のガバナーに就任した許國文^{キョクブン}さんの発案で、日本人留学生への奨学金制度をつくりました。学友みんながお金を出し合っただけの奨学金です。3年目となる2011年度からは、扶輪米山会第2代理事長・許邦福^{シエバンフ}夫妻のご厚意で毎年2人に増員することができました。

また、初代理事長であり台湾セブンイレブン社長でもある徐重仁^{ジョジュウニン}さんの主催で、街の公衆トイレなどの清掃活動を行っています。第3代理事長・陳思乾^{チンシケン}さんは、台湾の若者に日本留学の魅力をアピールするシンポジウムを企画し、扶輪米山会で開催しました。そのほか、刑務

感謝の気持ちをかたちにすることは、簡単なようで難しいものです。まして、何十年もその気持ちを維持することは容易ではありません。4月に古希を迎える米山学友・阮允恭ゲンインキョウさんは、帰国後約40年たった今も、毎年台湾から来日し、恩師や世話クラブ、お世話になったロータリアンへのお礼を欠かさずにいます。その阮さんが「日本に対する恩義の気持ちと、そこから培われた学友たちの絆を守り続けたい」と、寄稿してくれました。

所の慰問や本の寄贈も行っています。

米山記念奨学金をいただき、日本のロータリーにお世話になったことで培われた“絆”が、こうして扶輪米山会として集まって活動する原動力となり、輪となり、互いに良い刺激を受けながら人生を歩む力となっています。この見えない力こそ、何ものにも替え難い人生の宝です。

米山は顔の見える奨学金

私くらいの年齢になると、ロータリーに入りませんか？ というお誘いをたくさんいただきます。しかし私は、そのお気持ちだけをありがたく受け取っています。

台湾の米山学友には、ロータリアンとなって活躍する者が少なくありません。ですから、学友会よりもロータリアンとしての任務を優先せざるを得ない場合があります。そんな時、常に助け船を出せる存在がどうしても必要です。私は長年、学友会のほとんどの活動に参加している者として、扶輪米山会という一つの“家族”を守るという、自分に課した使命を全うしたいのです。

米山記念奨学金は「顔の見える奨学金」です。一人ひとりに世話クラブとカウンセラーがいて、日本社会の一端を知り、人として必要なことを学べるのです。この制度は、ロータリアンの皆さんが考える以上に素晴らしいものです。多くの方と出会い、感謝の気持ちは薄れるどころか、時間がたつほどに大きくなりました。40年が



米山梅吉氏の墓参りに来日した、扶輪米山会のメンバーほか

たった今、それが、さざ波のように繰り返し、私の心に打ち寄せてくるのです。そんな時、きちんとお礼を言う相手がいるのが米山なのです。相手が国、団体といった抽象的なものでは、感謝も伝えられません。

米山記念奨学金をいただき、米山学友となったことは、私にとって人生の勲章です。長年にわたって米山記念奨学事業を続けている日本のロータリアン、米山関係者の皆さんのおかげです。本当にありがとうございました。

ロータリー米山記念奨学会事務局

米山記念奨学事業に関するお問い合わせ・ご意見、または「よねやまだより」についてのご意見を、(財)ロータリー米山記念奨学会まで、ぜひお寄せください。

TEL: 03-3434-8681 FAX: 03-3578-8281

Eメール: mail@rotary-yoneyama.or.jp

台湾学友会の総会で、日本人奨学生が感謝のスピーチ



米山会理事の歓迎を受ける第3期奨学生

中華民国扶輪米山会による日本人若手研究者奨学金はスタートして、はや3年、米山学友らが「台湾の家族」となり、物心両面の手厚い支援を続けています。昨年9月から今年8月末までの第3期奨学生には、国立台湾大学に留学する工藤夕奈さんと、国立高雄師範大学に進学する加藤有花さんが採用されました。12月17日の扶輪米山会総会で紹介された2人は、「台湾と日本の懸け橋の役割を担っていききたい」と抱負を語り、学友会からの心のこもった支援に感謝を述べました。当日は、交流を続けている第1～2期の元奨学生も招かれ、充実した留学生生活を報告。扶輪米山会との交流で得た経験を振り返り、あらためて深い感謝の意を表しました。